

百鬼夜行絵巻跋文における儒学的受容

——歴博本と岩瀬文庫本の場合

名 倉 ミサ子

はじめに

「百鬼夜行絵巻」と称される現存伝本は七十巻以上が確認されている¹⁾。ほとんどの絵巻には詞書がない²⁾が、中に跋文を記したものがあつた。記主が儒者と分かっているのが、国立歴史民俗博物館蔵の狩野洞雲筆『百鬼夜行図』（歴博本とする）（図1）であり、記主は分からないものの、内容において歴博本に相似する跋文を有するのが、西尾市岩瀬文庫蔵『百鬼夜行画巻』（岩瀬文庫本とする）（図2）である。これらの跋文では、百鬼夜行絵巻が儒学的な見地から解釈されているようである。絵巻はどのように捉えられているのか、二巻を比較検討することによって、近世の百鬼夜行絵巻受容の一端を考えたい。

一 歴博本と岩瀬文庫本

百鬼夜行絵巻には、その名の通り鬼や妖怪たちが行進する様子が描かれている。室町時代の制作とされるのが真珠庵

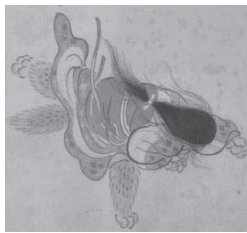
本（京都大徳寺塔頭・真珠庵所蔵）で、それ以外はすべて江戸時代以降に作られている。この真珠庵本と同じ妖怪が描かれた絵巻は、真珠庵本系（統）と呼ばれて伝本の大多数を占めているのだが、歴博本（図1）と岩瀬文庫本（図2）もまた、真珠庵本系（統）に該当する。真珠庵本は百鬼夜行絵巻の祖本^③に位置すると思われるが、その解明が未だ十分なされていない理由の一端は、詞書や奥付など文字が一切無く、これに関する資料も見当たらないことによる。一方、文字が無いことによって自由な解釈ができるという一面もあり、近世の受容の過程において、儒学の立場から解釈される百鬼夜行絵巻も現れた。それが歴博本と岩瀬文庫本である。

岩瀬文庫本（二七・五×七五・六・九厘）は、百鬼夜行図諸本の中で最も歴博本（二九・〇×一一九・六・〇厘）に近く、両者の跋文は趣意が似ている^④。さらに、この二つの絵巻には真珠庵本に無い妖怪がいくつか描き加えられているが、それらを含めたすべての妖怪の配置が両巻で一致しているため、歴博本と岩瀬文庫本は全く同じ構図を持つ絵巻だといえることができる。岩瀬文庫本は歴博本の摸本と見てよい。他の伝本には見られない妖怪の衣の模様が二つの絵巻ではほぼ一致していることは、その有力な証左であろう（下図）。大きな相違として挙げられるのは、歴博本には巻頭に題辞があつて跋文と同じく漢文で書かれているのに比べ、岩瀬文庫本には題辞がなく、跋文は漢字仮名交じり文で書かれる点である。

歴博本は真珠庵本系（統）の中では最も早く模写された絵巻の可能性があり、この点において歴博本の持つ意義は大きい。なぜならば、歴博本の跋文奥書に「甲子之夏」とあるのは貞享元年（一六八四）に当たり、これまで真珠庵本系統の絵巻のなかで模写年代のもっとも古い摸本は、狩野重信が狩野守房と名乗っていた元禄元年から宝永四年（一六八八—一七〇七）の間に模写した絵巻（守房本）とされているので、奥書の年紀に従えば、歴博本はそれより四年以上は早いという事になるからである^⑤。これに対して岩瀬文庫本は、近



岩瀬文庫本



歴博本

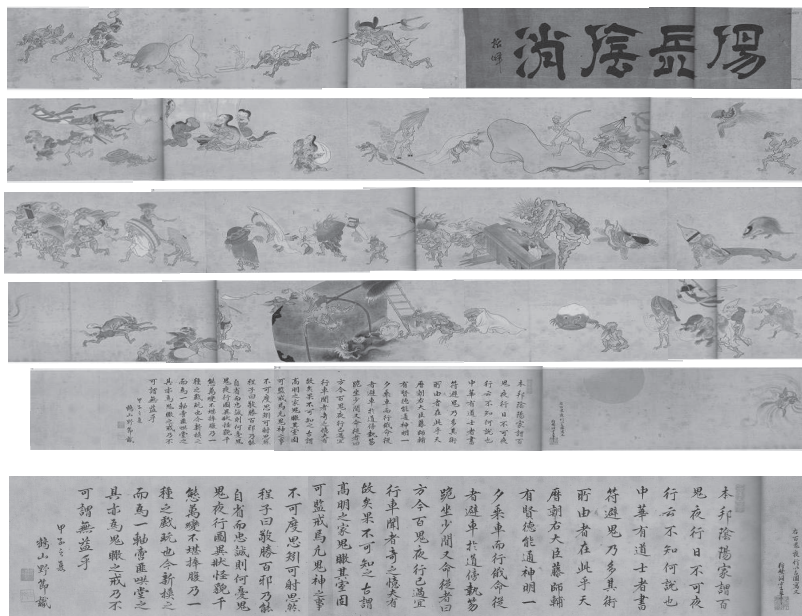


图1 歷博本

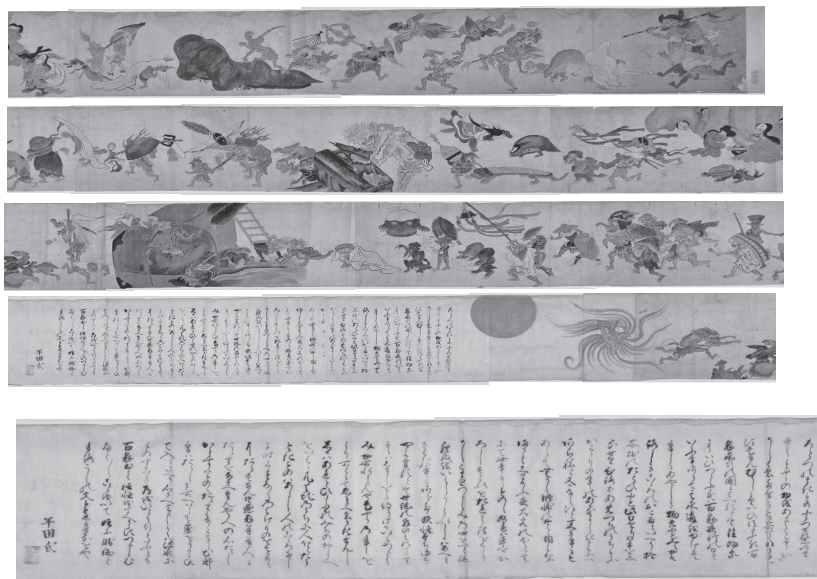


图2 岩瀬文庫本

世末期に作られているために、両巻の成立年代には凡そ二百年の差がある。それにもかかわらず、それぞれの跋文は儒学的視点に基づいているのに加えて、内容がよく似通っており、極めて近しい関係性が推定される。故に二巻は百鬼夜行絵巻の享受のあり方を見る上で興味深い。近世を通じて、儒者の間に同じような享受があった可能性を物語っていると考えられるからである。

歴博本の作者に関しては、本紙巻末に「右百鬼夜行以古図写之 狩野洞雲筆」とあることから、絵は狩野洞雲益信（一六二五～一六九四）の筆によることが分かる。洞雲は狩野探幽に学んでその養子となり、幕府御用絵師の駿河台狩野家初代となった人物である。跋文については、題辞に「括峰」、跋文奥書に「鶴山野節識」とある。これは共に人見友元鶴山（一六三七～一六九六）を表すもので、鶴山は姓が小野氏で名を節とも称した。『本朝通鑑』の編修にも携わった林羅山門下の儒者であり、『続本朝通巻』の編纂もしている。

一方、岩瀬文庫本の作者はどうか。絵は一流の絵師によるものとは思われず、跋文の奥書部分には「半田氏」と墨書され、その左に「半田蔵書」の朱印が認められるが、この「半田氏」が、果たして絵を描いた人物と同一なのか否かも含めて、他に手掛かりがないために現時点では分からない。跋文の筆跡については「近世前期頃の筆蹟を模写したもので写崩れあり。幕末頃の模本」とされている⁸。細い竹を軸とし、全巻を通して用紙の寸法も材質も一定ではなく、裏打ちもされていない。ただし、跋文が巻末の絵と同紙から書き出されているところから、跋文は後に付け足したものでなく、当初から予定されていたものと判断される。

以上述べたように、歴博本と岩瀬文庫本の二巻は絵巻の構成が似ていること、何よりも跋文があること、それが儒者によるあるいは儒者的な人物による跋文であること、成立年代に二百年の差はあるものの、二つの跋文に見える儒学的な要素から、近世を通じて同じような百鬼夜行絵巻の受容があった可能性が推測されること、などの点において検討する意義のある絵巻だと思われる。

二 歴博本の跋文

(一) 構成

歴博本には「陽長陰消」と書かれた題辞がある。これは、『周易』「繫辞上伝」に「一陰一陽する之を道と謂ふ」とする考えに基づく。すなわち、陰になったり陽になったり、相反し相対する陰陽二気の運行によつて万物の生成や変化を説明し、自然の理法を説く思想である。例えば月や夜を陰とし日や昼を陽とする類で、あらゆる物や事象が陰陽に分類され、すべてが消長を繰り返すとする。題辞の「陽長陰消」は最善、最高の状態を表現したものだと思われるが、陰陽の運行によればやがて陰に転じる可能性を孕んでいる⁽⁹⁾。

次に跋文の翻刻を記し、私に書き下し文に改めたものを括弧内に挙げる。(翻刻の斜線は行移りを示す。表記は現行の字体を用い、①などの丸で囲んだ数字を私に付した。数字は書き下し文と対応している。)

①本邦陰陽家謂百／鬼夜行日不可夜／行云不知何説也／中華有道士者書／符避鬼乃多其術／所由者在此乎②天／曆朝右大臣藤師輔／有賢德能通神明一／夕乘車而行俄命從／者避車於道傍執笏／跪坐少間又命從者曰／方今百鬼夜行已過宜／行車聞者奇之憶夫有／故矣果不可知之③古謂／高明之家鬼瞰其室固／可監戒為④凡鬼神之事／不可度思矧可射思然／⑤程子曰敬勝百邪乃能／自省而忠誠則何憂鬼／⑥鬼夜行凶異狀怪貌千／態万變不堪捧腹乃一／種之戲玩也今新模之／而為一軸壹匪哄堂之／具亦為鬼瞰之戒乃不／可謂無益乎

(①本邦陰陽家の謂ふ、百鬼夜行日、夜行すべからずと。云、何の説か知らざるなり。中華有道士は、符に書きて鬼を避けり。乃ち多くその術の由所は、此れに在るか。②天曆朝右大臣藤師輔は、賢徳有りて能く神明に通ず。一夕車に乗じて行くに、俄かに從者に命じて車を避け、道の傍らに笏を執り跪坐す。少間ありて又從者に命じて曰はく、

方に今、百鬼夜行已に過せり、宜しく車を行かせるべし。聞く者此れを奇しく憶ふに、夫故有るか。果たしてこれを知るべからず。③古に謂ふ、高明の家は鬼其室を瞰ふと。固く監戒を為すべし。④凡そ鬼神の事は思ひ度るべからず、矧んや思ひ射ふべけんや。然れば、⑤程子曰はく、敬は百邪に勝つと。乃ち能く自省して忠誠したれば、則ち何ぞ鬼を憂えん。⑥鬼の夜行図の異状の怪貌、千態万変は棒腹に堪えざれば、乃ち一種の戯玩なり。今新たにこれを模して一軸と為すは、菅だ堂の具を哄ふに匪ずして、亦鬼瞰の戒と為す。乃ち無益と謂ふべからざるや。）

右の跋文の内容は大きく四つの部分に分けられる。まず①で陰陽家の「百鬼夜行日」に関する説に触れ、②では院政期頃に成立した『大鏡』の師輔説話を例に挙げている。次の③④⑤では儒学の教えをいくつか挙げて鬼難に処する方法を説き、⑥でこの絵巻について述べる、という構成になっている。

(2) 儒学の教え

ここでは跋文の内容を構成に沿って検討していきたい。

① 「百鬼夜行日」

「陰陽家の謂ふ百鬼夜行日」については、応永二十一年（一四一四）に編集された陰陽家の書『暦林問答集』¹⁰に記されているが、ここでは陰陽の始終を理由として、子の刻の外出を禁じることに主眼が置かれている。

或問。忌_二夜行_一者何也。答曰。曆凶云、忌_二夜行_一者。名_二百鬼夜行日_一。但忌_レ時不_レ忌_レ日。今按。子時忌_レ之。是子陰陽之始終。故此時不_レ可_二出行_一。遠近皆死亡。

跋文は該当日の事を伝聞として記すのにとどまっているが、「中華有道士」が用いる僻邪符に言及して、儒者の観点から鬼を避ける方法を示している。

② 「右大臣藤師輔」…師輔説話

院政期に成立した『大鏡』¹¹には、藤原師輔が百鬼夜行の難を逃れたという説話が載せられている。次のようなもので

ある。(引用文は表記を改め、歴博本と岩瀬文庫本に関わる部分に傍線を付した。)

九條殿は百鬼夜行に遇はせ給へるは。何れの月と言ふ事は、えうけたまはらず、いみじう夜更けて、内より出で給ふに、大宮より南ざまへおはしますに、あは、の辻の程にて、御車のすだれ打ち垂れさせ給ひて、「御車牛もかき降ろせく」と、急ぎ仰せられければ、あやしと思へど、かき降ろしつ。御隨身・御前ども、如何なる事のおはしますぞと、御車のもとに近く参りたれば、御したすだれ麗しく引き垂れて、御笏とりてうつぶさせ給へるけしき、いみじう人にかしこまり申させ給へるさまにておはします。「御車はしぢにかくな。たゞ隨身どもは、長柄の左・右のくびきのもとにいと近くさぶらひて、先を高くをへ。さうしきども、声絶えさすな、御前ども近くあれ」と仰せられて、尊勝陀羅尼をいみじうよみたてまつらせ給。牛をば、御車の隠れの方に引き立てさせ給へり。さて時中ばかりありてぞ、御すだれ上げさせ給て、「今は、牛かけてやれ」と仰せられけれど、つゆ御供の人は心得ざりけり。

説話には「九條殿」とのみ記される師輔に、歴博本では「天曆朝右大臣」、「有賢徳能通神明」との説明が加えられている。師輔の地位を示したうえで、徳があり神明に通じているという人物像が付与されており、歴博本ではこのような人物が「車を避け、道の傍らに笏を執り跪坐」したことによって、百鬼夜行の難を逃れたと理解される。師輔の行動は、「御笏とりてうつぶさせ」「いみじう人にかしこまり申させ給へるさま」と記される説話に通じ、人知の及ばぬ対象を前に、畏敬や慎みを表した敬虔な態度と捉え得る。歴博本と説話では共に、従者たちには百鬼夜行に出会ったことが分かんかったが、これは人物の違いによるものと思われる。右説話で師輔は「尊勝陀羅尼」を唱える。この仏教的な要素は百鬼退散の重要な要因であるが、歴博本には出てこない。

③④⑤ 「古に謂ふ」：儒学の教え

「古謂」以下の三つの語句は、漢籍を典拠としている。まず、③「高明之家鬼瞰其室固」は、『周易』「(55) 豊」に対する注釈の一つで、多くの注釈書にみえる。¹²⁾

子雲云、炎炎は滅し、隆隆は絶ふる。雷を觀、火を觀るは盈りて実ちたり。天其の声を収し、地其の熱を蔵す。高明の家は鬼其の室を瞰ふ、正に此義と合したり。

「炎炎」、「隆隆」「盈」「実」は極まった状態を示す。「高明」とは位が高く勢力の強い人や金持ちの家をいう。物事が極まれば反転する、つまり隆盛が極まればやがて衰える故に十分用心せよと説くものであるが、これは二氣の運行を示す「陰陽消長」に通じる考え方でもあるだろう。

④「凡鬼神之事不可度思矧可射思然」は、『詩経』大雅・抑篇を典拠とする語句で、『中庸』第三(朱子章句十六章)には「詩に曰」として引かれている。

詩曰、鬼神の徳たる、其れ盛んなるかな。之を視れども見えず、之を聴けども聞こえず、物に體して遺す可あらず。天下の人をして、齊明し盛服して、以て祭祀を承げしむ。洋洋乎として、其の上¹³⁾に在るが如し。其の左右に在るが如し。詩に曰、神の格たる、度る可からず、矧んや射ふ可けんや、と。夫れ微の顕なる、誠の掎ふ可からざる、此の如きかな。

「格」は来る・到る、「射」は厭う・怠るの意で、鬼神を計ったり厭ったりすべきでない¹³⁾と説く。跋文は『中庸』に記された、見えず聞こえず形にも表れない鬼神を踏まえた上で、引用したのであろう。

⑤「敬勝百邪」は、程子(程明道)のことばである。「自省」と「忠誠」とが、百邪に勝つ方法としてここに提示されている。「敬」は敬うと共に慎む意もあることから、先の跋文②では「避車於道傍執笏跪坐」という行動を「敬」と捉えて、師輔の人物像に儒学的なあり方が付与されている可能性がある。朱子が編んだ『近思録』には「敬勝百邪」の前後に、「天地位を設けて易其の中に行はるるは、只是れ敬なればなり。敬なれば則ち間斷無し」、「敬をして以て内を直

くし、義にして以て外を方しくするは、仁なり」などの言がある。「敬勝百邪」は、朱子が邪惡との対立について敬の効用を主張しなかったものと解釈できる。¹⁴

跋文は、漢籍に見られる儒学者のことばに基づいてその教えを説いている。作者が近世朱子学を成立させ幕府に重用された儒者林羅山の息、林鷲峰を師とする儒官であれば、「百鬼夜行絵巻」を締めくくる儒学の教えとして、この語句は選ぶにふさわしいものであつたらう。

⑥ 「鬼夜行図」… 歴博本の鬼

⑥ 以下、この百鬼夜行図をどのように捉えているのか、記主・鶴山の考えが述べられている。ここで「戯玩」とは玩具、慰み物の意である。鬼は「戯玩」として、腹を抱えて大笑いする対象となつている。次いで、ただ哄い楽しむだけのために作るのではなく、鬼の夜行図を大いに「鬼瞰戒」にしようというなら、「無益」なことではないか、と結んでいる。

この直前までは、計り知れない存在の、いわば畏敬の対象として鬼神に向き合つていた。ところが、その儒学的な態度から一転して鬼が笑いの対象に変わり、またもや翻つて「鬼瞰戒」にするためにこの絵巻を作るといふ。次にこうした行為を「無益」なことかと反語で問いかけ、無益なことだと転じて跋文が終わる。この意味するところを次に考えたい。

(3) 畏敬と笑い

「鬼夜行図」に描かれた鬼と漢籍に記された鬼神の間には、跋文が向きあう姿勢に落差がある。これは可視化されているか否かの違いによるものと考えられる。跋文では異形の鬼のユーモラスな姿に言及しているが、「鬼夜行図」は見えることによつて笑いの対象となり、鬼は絵巻にとどまる「戯玩」に過ぎない。記述によれば「古」の教えにある鬼や鬼神は、人知を超えた計りがたい存在として畏敬の対象になつている。「夜行図」の鬼を戯玩として否定する反面、見

えない鬼神の存在を信じているのであろうか。「敬」していれば「百邪」にも勝つが、自省・忠誠という不断の努力を怠れば邪に負けてしまうのである。問われているのは自身のあり方だという見方ができる。跋文は、自分の中にあつて機会を「瞰」っている鬼こそ畏れるべきものと捉えているのかも知れない。ここには文字で書かれた鬼と絵に描かれた鬼との対照が見られる。「戯玩」「無益」とあるのは、『書経』「旅獒」の語句、「玩人喪徳、玩物喪志」が典拠と思われる。次のようなものである。

人を玩べば徳を喪い、物を玩べば志を喪ふ。志は道を以て寧く、言は道を以て接はる。無益を作して有益を害せざれば、功乃ち成る。

道徳の実践や修養を本とする儒者にとつての玩物とは、詩文風流の遊びに当たる¹⁵。跋文では鬼を指して「戯玩」と断じた上で、絵巻を作り「鬼瞰之戒」にすることを、「無益とは謂えないか、いや無益である」と言い切っている。しかし『書経』にこれを当てるなら、無益と断じた「今新模之而為一軸」という行為は、「功乃ち成る」に転じる可能性を孕んでいるのである。これについては後で検討する。

いずれにしても跋文は絵に導かれたものに相違あるまい。「棒腹」の直接の原因は「異状怪貌千態万変」とする絵の表現にあると思われるが、計りがたいものを描いたところに儒学者として面白味を見ているのではないか。漢文で尤もらしい体裁を整えたところで、所詮絵巻に描かれた鬼など「鬼瞰の戒」に出来ようはずのない「無益」なものであり、あるいは、これを「鬼瞰」に備えようとする行為もまた「棒腹」なものとして捉えているのかも知れない。無益をなす自身を自覚しつつ、高みから眺めて愉快を感じているやも知れず、「異状怪貌千態万変」という記述からは、鬼のひとつ一つを鑑賞して、表現を楽しんでいるような趣が窺える。

三 岩瀬文庫本の跋文

(1) 構成

岩瀬文庫本には題辭がなく、跋文は仮名交じり文で書かれている。以下に翻刻を引用する。¹⁶⁾ (原文の行移りは示さず、私に表記を改めて便宜上⑦のように番号と句読点を付した。)

一つの巻物に写せる絵あり。⑦世にことやうの物をあまたかけり。おかしくも猛くも見所すくならず。是なん昔よりいひ伝ふる百鬼夜行の図にはべるとぞ。⑧陰陽家にいひ伝ふるは百鬼夜行の日といふ事ありて、其夜道をゆけば、けしうあやしき物目にも見え、怖ろしき心の起こるといへり。拾芥抄の例ひにも此日どりの事をしるせり。広き天地のうち、世にかばかりの事のあるまじき際にはあらねど、又かならずとすべき事にもあらず。⑨むかし、師輔のおとど内よりまかで帰り給ふ夜、大宮のほとりにて此事にもやしぬれば、車を降ろしすだれを垂れて座をくだり畏まり、慎みの心を以て陀羅尼をいみじうよまれしかば、あへてさはる事もあらで、妖怪たちまち已みけるとぞ。世継の翁の物語りには、記しをき侍りけり。忌み慎みおそれざらんや。是やうの事をより所として絵にさへも描きけんかし。しかはあれど⑩聖の道の教へをいはば、凡天地のうちに人ほど貴ときものはあらじ。⑪人の心正しき時は、諸々の化物を怖るるに足らず。なんぞ悪鬼等善人に崇りをなすべけんや。人の心正しからずば、物の崇りもなどか無からむ。邪氣は正しき所へ入らず、虚を窺ひて入といへり。心さへ正しからば、深夜にもものすごき道をひとり行といふとも、百鬼出て妖怪をすべからず。慎むべし慎むべし。ここを以て⑫妖不勝徳ともろこしの文にも記せるをや。

跋文の内容は大きく四つの部分に分けられるが、歴博本に対応する部分を括弧に入れて示す。まず⑦でこの絵巻につ

いて述べることから始まっている（歴博本⑥）。次に⑧で陰陽家の「百鬼夜行日」に関する説に触れ（歴博本①）、⑨で『大鏡』の師輔説話を例に挙げる（歴博本②）。そして⑩では儒学的な教えを挙げて鬼に対処する方法を説く（歴博本③）④⑤」という構成になっている。並び方に若干の相違はあるものの、内容の組み立ては歴博本に呼応している。

（2） 儒学の教え

⑦ 「百鬼夜行の図」…岩瀬文庫本の鬼

ここでは絵巻の鬼について触れ、「異様のものをあまた」描いた絵を「おかしくも猛くも見所すくなからず」と記している。この記述からはたくさん描かれた「異様のもの」を怖れるのではなく、眺めて鑑賞する姿勢が感じられる。これは歴博本の⑥で、鬼の夜行図を単なる絵、「戯玩」として「異状怪貌千態万変」を眺め、「不堪棒腹」とする姿勢と似通うものがある。さらに岩瀬文庫本が「昔よりいひ伝ふる百鬼夜行の図」であることを表明している。

⑧ 「百鬼夜行の日」

歴博本と同じく陰陽家に伝える百鬼夜行日について触れているが、夜行によって起こる事象を説明している点が、歴博本には無い記述である。ここに挙げている『拾芥抄』¹⁷には、「百鬼夜行日不可夜行 子正 午二 巳三 戌四 未五 辰六」とある。次いで百鬼夜行の有無について、「あるまじき際にはあらねど」と否定する一方で、必ず無いとすべき事でもないとして、広い世の中に百鬼が存在する可能性を残している。この部分は歴博本で鬼の絵を笑う一方で、鬼神の事は思い度るべからずとして、十分注意することを説く態度と通じるのではなからうか。

⑨ 「師輔のおとど」…師輔説話

『大鏡』の師輔説話に従って、「陀羅尼をいみじうよまれしかば」と尊勝陀羅尼を唱えたことよって百鬼が退散したと記す。ここは明らかに仏教が前面に出ており、歴博本には無い記述である。しかし、師輔についての記述を見ると歴博本との共通点も窺える。「座をくだり畏まり、慎みの心を以て」、「忌み慎みおそれざらんや。」と記されるその態度か

ら、師輔の人物像には歴博本に相似した儒学的な視点が加えられていると捉えることができよう。鬼が退散した理由は「陀羅尼」だけにあるのではなく、敬して鬼を恐れない師輔の人物像も大きく関与している可能性がある。師輔説話に關するこの部分には、「陀羅尼」と明確に示された仏教と「畏まり」や「慎み」に垣間見える儒学的な要素が混在している。

跋文はさらに、「是やうの事」すなわち、師輔説話が「より所」となつてこの岩瀬文庫本の絵に表現された可能性を述べている。「是やうの事」という言い回しは、他にも「より所」がある可能性を示唆しているが、『付喪神記』には師輔に關する同様の説話があり、『宝物集』には師輔と藤原常行が同様に陀羅尼で鬼難を免れた話がある⁽¹⁸⁾。跋文はこれらを踏まえているのかも知れない。

⑩⑪⑫ 「聖の道の教へ」：儒学の教え

⑩ 「天地のうち人ほど貴きものはあらじ」とする人間観は、左記の『書経』（奉誓上）に基づくものである。

惟れ天地は万物の父母、惟れ人は万物の靈なり

人を万物の最上位に置く考えは、言い回しは異なるものの「天の万物を生ずる、唯人（のみ）貴しとなす」（『列氏』天瑞第一⁽¹⁹⁾）、「人は氣有りて生有り、知有りて亦且る義有り、故に最も天下の貴と為すなり。」（『荀子』卷第五王制篇第九）などに見られる。

日本においては林羅山⁽²⁰⁾「天地ノ間ニイキトシイケルモノ、人ヨリ貴キモノハナシ」など、多くは儒者によつて説かれたが、仏教僧の浅井了意による仮名草子『浮世物語』にも「夫、人は天地の中に生まれて、しかも万物の靈也。」と書かれている。この「人は万物の靈」ということばは、近世期に勧善懲悪の根柢として多用されていた⁽²²⁾。そうであるなら、百鬼夜行を描くこの絵巻に懲悪の手立てとして正しさが説かれるのは、むしろ当然であるのかもしれない。

⑪ 「人の心正しきとき」以下の部分では、心を正しく保つて重ねて説き、最後に呪文のように「慎むべし。慎むべし」と繰り返してまとめている。「諸々の化物」が、人の心のあり様に左右されるとする考え方は、歴博本の⑤で「敬勝百邪」

ということばで説くものと通底する。結局は人が問われることになるのだが、この考え方を象徴するのが「妖由人興也」で、『春秋左氏伝』（莊公十四年）は次のように記している。

人の忌む所は、其の気炎して以て之を取る。妖は人に由りて興るなり。人覺無くんば、妖自ら作らず。人常を棄つれば則ち妖興る。故に妖有り。

「覺」とは隙やあやまちや罪をいう。「妖由人興也」は、岩瀬文庫本の「邪気は正しき所へ入らず、虚を窺ひて入といへり」にそのまま適応できるが、南北朝時代の禅僧・義堂周信の『空華日用工夫略集』応安六年（一三七三）三月十九日条には「凡魔事発^レ心。若動則魔必乘^レ隙。不動則魔自退矣²⁵」すなわち、魔は人の心のすきに入ると説いている。中世から近世にかけての禅においては、仏教的思考から儒教的思考の優位への転換が見られた。²⁴ 慎んで心を正しく保てば何も恐れることはないと言説考は、宗教の枠を超えて受容されていたと思われる。堤邦彦氏は、妖怪変化の正体について、それを思い描く人間の気構えに求める心・妖・一元論の論法は、近世の儒者に共通する特色と捉えて、「近世初頭の啓蒙思想が生み出した人間洞察が儒仏を分かつた近似的価値観、世界観に支えられていた点をものがたる。」と論じている。

⑫「妖不勝徳」という語句は『史記』（股本紀第三）にある故事を典拠とするが、『十訓抄』（六ノ二十八）、『太平記三』（巻第三十）にも見られ、鳥山石燕の『今昔画図続百鬼』では、暁を描いた場面に使用されている。近藤瑞木氏はこの「妖は徳に勝たず」について、徳の備わった儒者が妖怪を撃退する説話が近世には少なくないのは、論理的な正しさや精神的な強靱さが備われれば、怪異は恐れるに足りないと言考え方が儒家によって説かれていたとする。岩瀬文庫本の跋文には、「聖の道の教へ」のなかに「崇り」ということばが混じっている。これは儒学の教えを仏教的なことばで説明するものと捉えられるが、あるいは堤氏の言うような儒仏を分かつた「近似的価値観、世界観」を示すものであるかも知れない。いずれにしても、百鬼夜行を儒学的に捉える見方は近世を通じてあったといえるだろう。

(3) 人は万物の霊

岩瀬文庫本跋文は漢字仮名交じり文で書かれているが、儒・仏・神の入り混じった享受のあり方を思わせる。儒学の教えを述べる中で「聖の道の教へ」として真つ先に、「凡天地のうちに人ほど貴きものはあらじ」を挙げているが、人が第一とするこの捉え方は、歴博本には見られない考え方と言える。ここには新しい人間観があるように見えるが、しかし人間に対するこのような見方は、先に見たように、古くから漢籍に記されているところから、近世後期になって認識を新たにされた捉え方とも解せられる。香川雅信氏は十八世紀後半に人間を「万物の霊長」と見なし、世界のすべてを人間の力によって支配することができるという認識を促したものとして、「貨幣」が大きな意味を持っているとする。確かに貨幣は価値観の転換に繋がるものとして大きな役割を果たしたと思われるが、岩瀬文庫本が作られた近世後期の儒者の間に、人に焦点を当てる考え方が注目されつつあったことも考慮する必要があるだろう。

むすび

歴博本で鬼・鬼神は人知を超えた存在であり、対処の術が漢文で説かれているが、仏教的な記述は見られない。漢文は儒者に相応しい形態であるが、儒学が正学となり、朱子学思想が教育の普及によって武士層・庶民上層へと浸透して教養化・常識化した寛政異学禁²⁶以前に歴博本は作られている。これを享受できる層は限られていたと思われる。

また、先に触れたように『書経』の「玩人喪徳、玩物喪志」の直後には、「無益を作して、有益を害せざれば、功乃ち成る」という文が続く。跋文では鬼を指して「戲玩」すなわち玩物と断じた上で、絵巻を作り「鬼瞰之戒」にすることを、無益と謂えないだろうか、いや無益であると言いつつ切形で終わっている。しかし『書経』を踏まえているのであれば、無益と断じた行為は、「有益を害せざれば」単なる無益にとどまらず、「功乃ち成る」に転じる可能性を孕んでい

る。跋文作者がこれを知らぬはずはあるまい。すると「功乃ち成る」の見込んで「無益を作」したという可能性も出てくる。すなわち、儒学に忠実な跋文という解釈である。果たしてどうであろうか。

近世前期の江戸儒林においては、幕府によって地位を保証された人々の、恵まれているがゆえの反現実志向があったところから、相対的に遊戯に向ったとされている。跋文作者の鶴山は竹洞の号を持ち、自宅には林家の人々や俳人の山口素堂らが数多集い、詩文や連歌、俳諧に興じたという²⁹⁾。歴博本の享受を知るには作者周辺にも目を配る必要があるだろう。

一方、儒学的ではあるが作者がはつきり分からない岩瀬文庫本は、幕末の朱子学思想がしだいに浸透して教養化・常識化した時代に作られている。儒官を一つの頂点として体系化された下層には、さまざまな形で儒学を学ぶ人々が現れたという³¹⁾。素朴とも見える岩瀬文庫本は、そのような人々の一人が手掛けたものかも知れない。作者が百鬼夜行の存在に懐疑的であること、人がもつとも貴いとするこゝばを前面に押し出して人間中心の考え方が窺えること、これもやはり時代の背景の中で生まれたものといえるだろう。

歴博本と岩瀬文庫本は、共に百鬼が夜行する絵を儒学の見地から捉えようとしている。描かれたものたちは鬼難をもたらす存在として、儒学の教えを説くための恰好の素材となつていたのである。しかしそこにはまた、儒者における「戯作」と受け止める視点も残されている³²⁾。本稿は歴博本と岩瀬文庫本の跋文紹介にとどまっているが、時代や文化における百鬼夜行絵巻の享受の問題とその意義については、改めて考察を行うこととしたい。

注 *引用文には適宜、私に傍線を付した。特に注記のないものは、新釈漢文大系（明治書院）から引用した。

(1) 小松和彦「バネル・ディスカッション 百鬼夜行の世界」(『人間文化』10、人間文化研究機構、二〇〇九二〇)。

(2) ニューヨーク公共図書館蔵スペンサーコレクション『百鬼夜行絵巻』と国立国会図書館蔵『百鬼夜行絵巻』には詞書があり、治承の末の福原遷都で荒れ果てた屋敷で起こった出来事が記されている。

- (3) 小松和彦氏は、真珠庵本とは別系統の百鬼夜行絵巻として国際日本文化研究センター蔵「百鬼ノ図」を挙げ、その祖本の方が真珠庵本より古い可能性がある」と指摘している(同『百鬼夜行絵巻の謎』集英社 二〇〇八)。
- (4) 岩瀬文庫古典籍書誌データベース。
- (5) 常光徹「百鬼夜行図」(『百鬼夜行の世界』人間文化研究機構 二〇〇九)。清水実「百鬼夜行図」(『特別展 大妖怪展―鬼と妖怪そしてゲゲゲ』三井文庫・三井記念美術館 二〇一三)。
- (6) 注4に同じ。
- (7) 注5に同じ。大庭卓也「人見竹洞と東阜心越―竹洞伝の一餉―」(『語文研究』82 九州大学国語国文学会 一九九六・一二)。
- (8) 注4に同じ。
- (9) 鈴木一馨「日本における風水と陰陽道」(林淳・小池淳一編著『陰陽道の講義』嵯峨野書院 二〇〇二)。
- (10) 「曆林問答集」積忌夜行第四十九(『群書類従第28輯』雑部 統群書類従完成会 一九三三)。「簞篋内伝金烏玉兔集」にも百鬼夜行日について記述されている。
- (11) 『大鏡』序(新編日本古典文学全集34 小学館 一九九六)。「宝物集」『付喪神記』にも同様の説話がある。
- (12) 『周易孔義集説』巻五十(四庫全書データベース)。他に『周易義海撮要』巻六、『周易伝註』巻四、『周易観象』巻八等。
- (13) 『二程全書 上』中文出版社 一九七二。
- (14) 市川安司「巻四・存養」余説(『近思録』日本思想大系37 明治書院 一九七五)。
- (15) 掛斐高「風雅論」(『俳諧と漢文学』和漢比較文学叢書16 汲古書院 一九九四)。
- (16) 注4に同じ。
- (17) 『拾芥抄』諸事吉凶部第三十八(『禁秘抄考註 拾芥抄』改訂増補故実叢書22 明治図書出版 一九九三)。
- (18) 「尊称陀羅尼」で鬼難を避けた話は他に、「今昔物語集」巻第十四「依尊勝陀羅尼験力通鬼難語第四十二」、「打聞集」二十三「尊勝陀羅尼事」等。
- (19) 『列氏上』天瑞第一(岩波文庫 岩波書店 一九八七)。
- (20) 「三徳抄」(藤原惺窩 林羅山)日本思想大系28 一九七五)。他に中江藤樹「翁問答」、貝原益軒「五常訓 卷之一」等。

- (21) 『浮世物語』（『仮名草子集』新日本古典文学大系74 岩波書店 一九九二）。「イソップ物語」を翻訳・ローマ字表記した『イソポ
のハブラス』にも同様の語が記される。
- (22) 西田浩三『人は万物の霊 日本近世文学の条件』森話社 二〇〇七。
- (23) 『空華日用工夫略集二』（『続史籍集覽』近藤瓶城編 近藤出版部 一九三〇）。
- (24) 衣笠安喜『近影儒学思想史の研究』法政大学出版局 一九七六。
- (25) 堤邦彦「怪異との共棲―江戸時代人は何を怖れたか―」（『伝承文学研究』50 二〇〇〇・五）。
- (26) 近藤瑞木「儒者の妖怪退治―近世怪異譚と儒家思想―」（『日本文学』55 日本文学協会 二〇〇六・四）。
- (27) 香川雅信『江戸の妖怪革命』角川学芸出版 二〇一三。
- (28) 注24に同じ。
- (29) 日野龍夫「近世前期の江戸詩壇」（『江戸の儒学』日野龍夫著作集1 ペリかん社 二〇〇五）。
- (30) 大場卓也「水竹深処」考―人見竹洞の別墅と江戸俳壇―（『近世文藝』68 日本近世文学会 二〇〇二・九）。
- (31) 横田冬彦『知識と学問をになう人びと』吉川弘文館 二〇〇七。
- (32) 歴博本を戯作とする見方について、小林幸夫氏よりご教示賜った。

図像典拠

- ・岩瀬文庫本 岩瀬文庫蔵デジタルデータ。
 ・歴博本『百鬼夜行の世界』人間文化研究機構 二〇〇九。